史料「天保四年不作動控」

我妻建治

「天保四年不作動控」と題する一冊の記録が手許にある。半紙二折で、墨付表紙とも二十五枚の小冊子である。この筆者としては「奥千賀浦中安八十吉二十二才」と書かれている。八十吉とは如何なる人物なるや、今日ではこれを鮮明することが殆ど不可能であるが、「奥千賀浦」住とあるから、今日の宮城県塩釜市在住の一庶民であったと推測される。

この小冊子の和紙の綴じ方からすれば、八十吉は、天保四年という、彼にとって未曽有の大凶作・大飢饉に際会し、これによって起った社会的諸現象を、多少とも覚書として記録に留めておくべく、まず、二十枚の和紙の小冊子を作成し、これに標記の表題を付して、十一月より書きはじめたと思われる。八十吉は、かくて、天保四年の天気概況と作柄の様子、不作によって惹起した諸物価の変動な

どを書き留めたが、紙数に余りがあったので、以下、断続的ながら、同様の形式で、安政七年次まで書きつぐこととなったらしい。八十吉は、或いは、この記述に興味を持ったかして、さらに、これに和紙を付加して慶応二年、さらに同三年次まで書き加えている。

この小冊子の翻刻を、ここにあえて企図したのは、その内容が東北の塩釜周辺という一地方のことにすぎないが、それは、一地方なりに、そして断続的ながらも三十年余にわたって幕末の物価の変動の様相や東北の農村の慢性的不作の状況が記録されていて興味深いものとなっているからである。しかし、それらの記述、とくに物価や相場などの記述に日本という国家的広がりなり、幕末開港と関連した国際的視野を思わせるところへの言及があったならば、なお一層の関心が寄せられることとなったであろう。諸色の値上りなどについて、八十吉は、これを、ただ「金銀之位落居ル訳と世上一統唱ニ候」と記述するだけで、その「金銀之位落居ル」根本の社会経済的背景には言及していないのである。

ともあれ、これは、幕末の世相を知る上に、きわめて貴重な記録であるとみてよいであろう。

さて、この小冊子を翻刻するに当って、左記の要領によった。

一、用字について、誤字、変体仮名などはこれを書き改め、漢字は常用漢字を用いた。ただし、文書の上で、通常的に用いられる「ゟ」（より）、「者」（は）、「江」（え）、「茂」（も）、「ニ而」（にて）などは原文のままとした。

二、句読点は打たず、一字をあけたままとし、虫喰いなど不分明の文字は□で示し、判読し難いも

のは「無心（マヽ）」とした。

三、用紙の折目に……を入れ、紙数ごとに「――」を入れ、ノンブルを付した。また、編者の注記は〔　〕によって示した。

〔表紙〕

天保四年不作動控

〔裏白〕

天保四年癸巳

一　先気候者土用中涼しくして
ひとい物ヲ着ル事まれ也　袷の身物
なり　それゟ段〻稲ぼ出随分
穂ハよく出たれ共出方誠ニをくれる
八月朔日大嵐誠ニきひしき事也
二日者晴其後五六日頃ニ西風甚有
大ニ田畑さわる也　八月廿日頃迄ニ稲

(3)

出そろい　此時米相場弐斗弐三升
弐斗ニなり
之物也　それゟ大根出随分大当り
なり　先はしめ者六七文ヨリ段〻
十月中者九文十文十一文ヨリ段〻十一月
小の大根拾五文中ハ弐拾五文大ハ三四十ゟ
五六十文迄也　ねんしん牛房何れも
高直也　十一月定相場立玄米
壱斗七升也　餅米者壱斗五升也

同廿五日御宅着

一　大公儀様ヨリ十一月中方々御祈祷有於当社ニ

同十一月十二日ヨリ十八日迄昼夜七日之間

屋形様ゟ大方之御祈祷あり　同

十九日ゟ向七日法蓮寺様時分御祈祷

御名代様二度御参詣あり

但し御城下御祭礼なし

但し雲上寺ニ十夜あり

(2)

豆ハ弐斗也　赤豆ハ壱升ニ付百五拾ゟ

百七拾文也　麦ハ壱升百弐拾文也　そバ

壱升八十五文也　小麦も八十五文也　何

れも

相場斗ニテ大不足物也　銭相場十一月

壱貫五百弐拾文御蔵相場壱貫五百五拾文

也

穀物なとハ勝手次第ニ在郷ヲ廻り

あへたいニテ米ハ壱斗弐三升ゟ買物多シ

依テ諸役人大ニきひしき事也

一　酒屋者一切とまりなれ共かくし物

……

有　尤屋形様十一月十五日江戸表御立

(3)

一　めのこト云テ昆布ヲせい法の物売也

是ハ壱升百五拾文也　所々ニテ喰物売

餅ハ色々物かてニ入ル也　先石炭かき炭

さくづの類入ル也　御城下ニテへびの大ば

と云物ヲ餅ニ入其餅喰たる人多分死ル也

右ニ依テめつたにハくわれぬ事也　団子

同様なり　酒ハ壱盃六十ゟ百四拾文迄
油ハ壱盃百四拾五文魚油ハ八十五文也
豆腐ハ壱ッ十文也　きらすハ弐十五文也

……

まめかすハ壱升四拾五文也　味噌壱升
百四拾文也　醤油壱盃弐十八文也
尤六月末ゟ十月はしめ迄一切手作の
なき物へ一日置ニ玄米弐升ツヽ渡候也
但し御宮町御蔵ニテはかるなり（札あり）　同
十月中ゟ問屋ニテ壱升ツヽ札買なり
其ヨリ十二月段〻ツメニなり牛房ハ
壱把四五十ヨリ百文迄ある也　大根ハ
少シ下直ニなる也　上ハ四十中ハ三十ヨリ十
文

(4)

迄　同十二月廿八日ニ御上様ヨリ米三升
ヨリ七八升ツヽ家内の人数次第ニテ被下候
事　但し
極こんきうなる物斗也　但し十月の内ハ
佐浦屋富右衛門殿ヨリ
極ひんの者ニ少〻手当之事
十二月ノツメニ也米少し多クなる事
問屋ニテ壱斗三升ニなる　餅米ハ壱斗
位ノ物也　但し餅米ハ沢山ニある也
駄ちんハ有テ馬持共大ニ宜敷事

……

濁さけハ壱盃五十文也　旅人旅籠代
上ハ三分（カ）中ハ弐百八拾文の者也　余リ高キ

物ニ
無之候　赤豆ハ壱升弐百文ヨリ弐百五十迄
豆ハ壱斗八升也　麦小麦何れも不足
ほし葉ハ金一歩ニ付十七掛位の物也
△ツメ餅随分相応ミナ世けんニテ摧也　余り
ふつそうニモ無之候　但しわらひ餅なと
売物ニ多し

(5)

天保五甲午歳正月ニなる

一　市中相場玄米ニテ壱歩ニ付壱斗三升ニ
なる也　粳餅共大ニ沢山ニ罷成候　人気も
格別よろしく罷成候　赤豆壱升ニ
百六拾位ニ罷成候　二月ニなり段々人気も
よく罷成候

一　極ひんの物すくいのため二月十二日ヨリ町
内道
ふしん致候事　老若男女ニかきらす
相出候　日ニ百五六十人又ハ弐百人位ツヽ
毎日

……

相出候　米壱升ヨリ五合壱盃なとゝ
段々かせき次第ヲ以渡候事　右米ハ
当町の内心ある人々ヨリ壱俵ヨリ七俵
迄段々相出し惣高ニテ八拾俵斗之高ニなる
事
一　三月十一日ニ雪ふる　冬の雪ならバ
八九寸もつもるくらいふる也　春の雪な
れバ
漸く壱弐寸もつもる也　同十三日ニ少々

ふる也

△三月の御神事御下弐斗ニテ祭出し候

(6)

一　清酒壱盃ニ付百五拾文ヨリ弐百文迄
にこり酒ハ三十八文ヨリ五拾六文迄有也
五月中旬ヨリ米少ゝ下リ壱斗五升
ニなる　にこり酒も品ゝ多シ

一　六月晴天ツゝいテ誠ニ上ゝ也　しかし
麦者ちかへ物也　四分位之物也
小麦大不作　同六月十一日大雷也
誠ニきび敷事也　十二日ヨリ晴天続
暑気甚敷事言ニのべかたし

……

米相場壱斗六升ニなる　七月十二日ニ
雨ふる　雨不足ニテ水切也　七月廿日
頃ゟ壱斗八升ニなる　同七月十二日朝
大風砂ヲ飛し言ニのべかたし
しかし鳥渡の事也　それゟ雨ニなる
同八月はしめゟ玄米弐斗ニなる　弥増
作毛もよろしき故八月中旬ゟ弐斗弐升
同廿日頃より弐斗四升ニなる

(7)

一　大根虫ニくわれ近在ニ不足物也　尤
高直也

一　松山ノ舟越ト申所へ百四十刈之田地へ
八重穂(ヤイボ)出る事誠ニ豊年之印考る也
九月中ゟ米三斗ニなる　十月ゟ三斗四升
三斗八升となる　濁酒者拾四文ゟ十八文
迄

ある也

……

天保六乙未歳不作控

一　随分気候之間宜敷当年者
よろ敷方と世けん一統人気も宜敷
候処　閏七月五日夜七ツ頃ゟ雨ふり
六日ニ罷成候テ大雨　鳥渡もはれ間なく
ふりツゝき　七日朝大洪水新茶屋(ママ)
八百久とのノ浦通くツれ　木小家雪いん

(8)

小座敷流れ　二井町ノ土橋御代橋
其次のはし横丁之板橋右之橋く
皆相落候　誠ニ大辺之水ニ御座候　何年ニ
も覚のなき水也と申事ニ御座候　この水ニ
付田畑のいたみ大辺之事ニ候

同年作毛之見積

四分くらいの見積

御上様御取立行方至而無之　百姓
大迷惑仕候

……

天保七丙申年不作控

一　春気候相応四月十二日此日甲子也
此夜雨ふり　それゟ雨ツゝき日の
てる事三分雨ハ七分の程ニ罷成　段く
六月はしめより町方へ出穀不足ニテ此時
玄米相場弐斗三升也　同月末より弐斗
壱升なり　七月より弐斗　是より札相

渡ス

一軒へ壱升ツヽ問屋ニテ渡ス　壱升ニ付八十三文

同月中旬より壱斗八升ニなる　同十八日ニ大

(9)

風雨之事言ニのべかたし　稲の出方

三十日もおくれニ御座候　何重ニ大雨はかり

来ル也　同七月廿日頃ゟ壱斗五升ニなる

同

八月はしめより壱斗二升ニなる　これハ

問屋

ニ而壱升渡しの相場也　在郷へ入込相躰

買ハ壱斗ゟ段〻八月中旬ニハ玄米ニテ

壱切ニ八升又ハ七升五合　白米ハ六升五合　より七升

くらい迄ある也　赤豆ハ百八十文　豆ハ壱升百文

からそバ〇百文　から麦壱切ニ弐斗より

弐斗五六升くらい　小麦壱切ニ壱斗四升

又ハ五升

……

かほちや大高直也

一　銭相場壱切ニ壱貫五百四十文ハ町方

米問屋ハ壱貫六百弐十文也

一　八月十七日ゟ玄米壱切ニ壱斗ト也　壱升

百六十壱文ツヽ右問屋相場也

同月廿日頃より御宮町御蔵ニ而米

渡ス也　是ハ壱人ニ付壱盃ツヽ之割合なり

一　九月中旬より相躰之相場者玄米ニテ七升六升也　白米五升五合より五升くらい也

小麦

粉ハ壱升百弐十文　豆粉ハ壱升百文

(10)

十月米相場同し也　十一月より御宮町御蔵ニ而上中下と米三段ニ渡ス也　上札ハ七升之割也

中札ハ八升之割也　下札ハ壱斗之割也　十二月

但し一日置ニ米壱人へ付壱盃ツヽ也

至テなる悪気弥増也　処〻ニ死人多し

餅なとも

ツく家不足

〔天保八年〕

酉正月

一　大豆壱升百六拾文　赤豆壱升弐百九十より

弐百七八十迄有也　わらひ粉壱歩ニ壱貫六百め

豆粉壱升百八十文　しひな粉壱升百六十文

そは粉壱升弐百八十文　下り酒壱盃百六十文

これハあまりよろしからさる品也　濁さけハ

壱盃ニ七十文　味噌壱升百四十五文　豆ふハ

壱ッ十四文　きらす壱盃八文　ところ壱

本

……

三拾文　但しほり候まゝ也　三四月大豆ハ弐百十文

玄米ハ壱歩ニ上米四升五合下米五升五合位也

白米四升也　かちめ壱歩ニ付十五六貫めも也　めのこハ

壱升百六十文より段〻下ある也　四月中旬ゟ

米四升下米五升也　同月十五日昼四ッ時初

雷様ニ御座候　小雨ふる也　五月田植之儀者

ない不足ニ付一統困入候　田植おくれ候

事ハ

六月末迄御座候　此時新麦相出相場

問屋ニ而者壱升ニ付代六拾文相躰之

売買者四十文より五十文くらい迄

有なり　右麦ニて景気少し相直し申候

米相場古米上〻ハ五升より五升五合迄有

(11)

下米者八升迄有　豆ハ壱升百八十文也

七月中旬より米又少し上り四升五合より

下ハ五升五合より段〻から麦ハ壱升八十

文ニ

罷成候　小麦ハ壱升ニ百拾文　赤豆ハ

弐百八十文　同八月中旬より新米少し

相出壱切ニ八升より九升迄ある也　新赤

豆ハ

壱升ニ付百文より百三十文くらい迄有也
濁酒ハ壱盃六十文ニ罷成候　豆ふハ十四文
一九月ニ罷成　新米壱斗ゟ壱斗壱弐升迄
十月ニ成　米壱斗三升ゟ四升五升迄ある
也
豆ハ弐斗五升　赤豆壱升ニ付百文より
九十文迄有　濁酒ハ壱盃四十文より
……
四十五文迄又下り三十五文より三十文迄
同十月末ハ米壱斗六升ニなる　同十一月
中旬ゟ米少し高直ニなる　壱斗五升也
同十二月八日より壱斗四升ニなる也　同
十五日
頃より壱斗三升也　銀ハ壱斗弐升也

天保九年之夏

春ゟ六月初メ迄雨フラシニ付　田植迷惑
仕候
同六月廿日頃ヨリ雨フリ　サムクシテ又餓
死之
気候ニ同シ夏也　然シ同月卅日ゟ晴天ニ罷
成候
又七月四五日ゟ雨フリ　米高直ニ罷成候
七月八日
ゟ壱歩ハ八升ニ而相躰相場也　同月十二日
ゟ十八日迄
大法之御祈祷有

(12)

喰物拵方控

一　麦ハ常ニハにるなれ共　是ハふかすハよろ敷候　ふかし
桶へあけ　其ふかし湯ヲ麦へかけ　蓋ヲしておもす也
よくはせる也　次ニ水ニテさわす也

一　きらす壱升粉壱升合テ餅ヲ拵ル事
先きらすヲすり　鉢ニテよくする也　次ニ粉ヲ入テ
する也　葛半貝斗水ニテトキのべる也
次ニ
ゆてゝ喰也　誠奇妙也　但し粉ハ何の粉テもヨシ

一　加ゆハ朝ニ喰ならハ其前夜煮テ置べし
これなれバ米一升ニ付水八九升入ニモ随分ヨし

……

トコロノセイ法

一　トコロよくあらい　毛をとり　こまかにきさみ
白水(しラミツ)ニ而煮也　又引上たゞの水ニ而あわを
とり〳〵煮る也　このあわがにかき者也
後ニ
水ニツケ置用る也　時〻水ヲ替るハヨし

麦餅の伝品〻御座候

(13)

嘉永六丑歳大日デリノ支

一　同年春相応四月十四日雨降　其ノチ
日テリニ罷成　八月下旬迄大ニサハキ候事
以前三十年程先年ノ年ニ旱魃有ト云トも
此度程ニハ在す候事　水汲昼夜カンダン
ナク
山沢ヲ欠廻し一統迷惑致候　金山井戸
掘抜井戸ニテ少シヨク候　田畑無仕付宮
城
郡ハ六分通也　植仕付致候分も水カヽリ
ナキ
処ハ実ノリ不申候　利符春日萱谷沢乙
……
今市辺迄吉ト云共　残村ハ大ニ困入申候
畑物豆小豆一円ト申程トリ不申　米相場
秋ヨリ高直ニ相成　金壱切ニ二斗八升又ハ
十一月中ニハ二斗八九升ヨリ三斗迄ニナル
豆ハ
壱升七十文　小豆一升百三四十文

嘉永七甲寅歳正月

一　当年者万事気候宜敷　風雨順時
田畑共ニ相応之実入也　春ゟ夏迄米
相場金壱歩ニ付弐斗七八升　新米相出
三斗壱弐升九月迄同断　豆四斗二三升
小豆ハ壱升三十五六文ゟ四十文位迄トナ
ル

(14)

安政四丁巳歳

一　春時候相応五月節句雪降る事

四ツ時ゟ暮六ツ迄　此節之雪之間たまる
事ニハ無之候得共　如右之降候事誠
まれなる事と老人之語ニ候　右雪ニ而
苗そたち大ニおくれ　閏五月中旬迄田植
致候事故作毛六分ト見積相置候

安政六己未歳

……

一　初春相応米相場金壱切ニ付弐斗二三升
四月ゟ米上リ　五六月頃ハ金壱切ニ付玄米
壱斗六升ゟ　相対買ハ壱石ニテ手形弐十五
切　金壱歩四切之割
ゟ弐拾六七切程迄在之　六月下旬ニ相至
り
天気引続　田上も景気宜敷罷成候ニ付
壱斗八升ニなル　然共市中出石不足也
七月廿五日大嵐　御社林之杉七十本程
倒申候　同廿六日廿七日西風甚有　又以
八月十三日四ツ時ゟ大風雨言語ニのべか
たし

(15)

御社林之松杉取合三百本已上相倒申候
往還並木拾五六本根返り風折相出候事
夫ゟ弥増米穀不足ニ罷成　米一石ニ而
手形三拾切ゟ三拾五六切迄ニ成　十一月
ゟ在〻江割付米被仰渡　金壱切ニ壱斗弐
升
相場手形壱切ニ三升ツヽ札米借石之者ハ
半切ツヽ壱升五合折〻被相渡候得共　相
対

ニ而八金壱切ニ八升九升之相場也　十二月
都而物之高直なる事言語ニのべかたし

……

油壱升壱貫百拾文　醤油弐百文也
大根十八九文ゟ三拾文程迄　紙□□□
高直　きぬ糸壱くり五拾文古今無類之
直段也　米不足壱石ニ付手形五拾切　餅
米
同断　赤豆壱升弐百三四拾文　豆ハ金
壱歩ニ壱斗弐升くらい
附り正金誠ニ以不足壱歩ニ付手形
九切拾切之入替銭一円無之　板札
紙札之以通用仕候事

同安政七庚申年正月ニ成
閏三月ゟ万延元年トナル

一　出穀一円無之　同月廿六日ニ御払米
人頭手形弐切ツヽ此米六升借屋へ右まる（マヽ）
被相渡候事　正金増ゝ不足切替ニ手形
拾弐切拾三切之由ニ相聞得申候　尚夫か
物之高直成る事言語ニ述難候　米壱石ニ而
五拾五切ゟ段ゝ上候而相対買仕候由也
絹糸高直ニなる事何も八文之糸壱くり

……

五拾五文也　二月十日頃ゟ醤油壱升弐百
五十文也
酢壱升弐百文也　此節手形切替十五切
ゟ十六切在之候事　米壱石ニ付手形
百切余ニ追ゝ相成候事　髪結代五拾文

清酒壱升四百文ゟ他郡酒壱升
七百弐三拾文位迄ある也　又宜敷品者
壱升ニ付手形弐切ゟ其上も在之候事
三月中旬ゟ米少〻下直ニ而壱石ニ而ハ九十
切
八拾切之割ニ而壱切ニ付米壱升壱盃

(17)

ツヽの打払在之　右米ハ在〻へ割付
ニ而被相出候分　味噌壱升手形壱切
閏三月三日ゟ醤油壱升同壱切ニ
相成申候　割木壱駄手形弐切位也
四月ニなり又〻米上り　壱石ニ而手形百
切ゟ百弐三拾切迄在〻ニ而売由ニ候
四月ゟ手形凡相直り　金壱歩ニ十六切
ニ相成申候　銭相場壱貫六百文ニ而相成

候得共銭不足ニ而誠ニ困入申候　諸商物ゟ
……
手入相成　醤油ハ四月下旬五月初迄ハ
壱升弐百文之処五月中旬ゟ三十八文
之書上ニ御座候　五月十三日七月廿六日
両度
大風雨ト云共田畑ハサハリ無之　八月
九月米少〻下り壱石ニテ八貫文
位ニ相成　作毛モ相応ニ候得共人気悪キ
ニヤ　十月中旬ゟ米又〻上り一石ニテ十
貫
文くらいゟ手形百十弐十切迄無心仕候而
買調申候　豆不足高直壱升ニ而

(18)

百文　小豆壱升百五十六文　十一月ニ
相成弐百文ト罷成　米豆共ニ市中へ
一円出穀なし　十月頃ゟ塩不足ニ付
一統困入申候　かくし売壱俵三〆文ゟ
三〆五六百文迄売由ニ御座候　味噌ハ十月
中旬ゟ壱升百七十文　同下旬ゟ売不申候

奥千賀浦
天保四年　中安
十一月書之　八十吉書
二十二才

(19)

〔裏白〕

わすれまい
天保巳四年之米相場
春三春一九升
八升
是ハをけ天保ル酉之
はるよりハ四升五升て
米ハなしと哉
終

(20)

慶応二丙寅歳

一　春季候相応併シ風多シ折〻大風
有　苗ノソタチ至テヲクレ　田植モ十日
モ
ヲクレ候ゑ　五月十一日大雨有テ所〻
水冠有　此節米相場金壱歩ニ弐斗
都テ去年中ゟ引続物之高直成事

古今稀なる由ニ候　夫ト申ハ金銀之位
落居ル訳と世上一統唱ニ候　絹布類ヲ
初トシテ木綿紙炭薪ニ至ル迄無類

……

之直段也　生糸一駄千両一箇
弐百五十両木綿類下ノ拭留ニテ金三歩三
朱
右ニ引合諸品如是手拭一本弐百七八十
一　土用前ヨリ冷気引続　土用ニ成候テも
左程暑気ト申日無之　土用後ニ少ゝ
残暑有テ可也ノ稲作ト相心得申候
早稲ハ七月十四五日ゟ出穂致　夫ゟ段ゝ
中稲迄同月下旬迄出穂罷成　是ニテハ
可なり宜敷かるへくと致居候処　八月

(21)

朔日九ツ時ゟ雨ニナリ二日ニ至り大嵐
田畑ニサハル事甚シ　此嵐前ハ米不足トハ
乍申玄米壱升弐百文位ニテ難渋者へ
御払米札渡候也　右嵐後ニ相成米一切
無之　相対買壱石ニ付二十七貫程之
由ニ相聞得申候　宇トン粉そば粉ウレ
申候　町方相応之者ゟ五俵十俵ッ、
為出払仕候　人頭ハ三升借屋弐升ッ、
払ニテ都合米弐拾四俵程入也　在方
ゟハ一円払米ナシ　八月廿日御蔵籾

……

三百俵塩釜町難渋者江御貸付
罷成百俵ッ、三度ニ御渡ニ罷成候事

八月廿三日御城下米相場金壱歩ニ付
玄米ニ而六升ニ直段相立候事　油壱升
壱貫百文也　麦壱升弐百六拾七文也
在方ゟ相対買米一石ニテ三十貫文
買候者御座候事　九月ニ相成弥〻
米高直壱石ニ付金五両又ハ三十三貫文
程ニ買候者御座候事　清酒一盃ニ付
百弐十文ゟ百三拾文　ウトン粉壱升
壱〆六百文ニナル　赤豆壱升ニ付
三百文　十一月下旬白米一升四百三十文
也
十二月米相場金壱歩ニ五升と相定候
得共出穀無御座候　濁酒壱盃百拾文
……
諸品高直咄しニ相成兼候節餅も
多分相減候事　清酒壱升弐貫文ゟ
壱貫文位迄アリ

〔慶応三年〕　丁卯

正月元日天気よし　弥増米引物
金壱歩ニ四升ゟ内相場在之由ニ御座候
清酒前同断　濁酒壱盃百廿文ト
なる　小豆壱升四百七拾文　二月ニなり

(22)

百六十文也　白米一升四百文位　カラ麦
一升百弐十文ゟ百三拾文迄　味噌ツキ
麦壱升三百弐十文ツヽ十月八日ニ買申候
元糀一切止リ　濁酒壱盃九十文
清酒壱盃百七拾五文　油壱升ニテ
壱〆四百文　十一月三日ゟ油壱升

米同断　豆壱升三百弐三拾文也
味噌壱升五百文　醤油三百八十文
杉板金壱切ニ八尺　松板壱丈位也

(23)

二月六日夜九ツ半時出火　新川岸
酒屋勘七室ゟ火相出候由ニテ釜ノ前
上本町下本町南町船戸川岸新屋敷
白坂二井町ハ林屋迄　向ハ明寿院迄
焼失竈数凡四百程　明六ツ時ニ火
止リ　誠ニ以当所初テ之大火ニ御座候事
表人頭弐百五拾三軒　裏店借屋共
百弐三拾軒焼失　死人三拾三人
死馬壱疋　目もあてられぬ次第也

……

三月ニ也米金壱歩ニ玄米三升五合
麦壱升四百五拾五文ニ買調候
清酒上物壱升弐貫文
三月十六日焼死為供養　御前様
ゟ施餓鬼東園寺焼跡ニテ大年寺
方丈様御上下七拾人程　十七日同寺
御自分施餓鬼水燈会なり　同
十八日田丸庄左衛門ゟ施餓鬼也
三月廿日頃中白米壱升ニ付五百弐十文
濁酒壱盃百弐拾文

(24)

〔以下余白〕